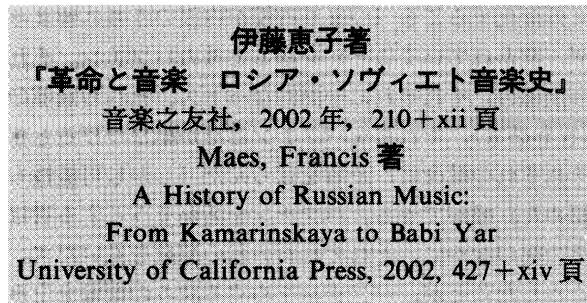




梅 津 紀 雄

本稿で取り上げるような西洋近代音楽（クラシック）に焦点を当てたロシアの音楽史は、日本語圏でも英語圏でもさほど多いわけではない。日本語圏で主な例を挙げれば、ボリス・アサーフィエフの『ロシアの音楽』、リームスキイ・コールサコフの『我が音楽生活の年代記』には、抄訳ながらも日本語訳があったが、絶版になって久しい（樹下節訳、音楽之友社、1954/『わが音楽の生涯』服部龍太郎訳、音楽之友社、1952）。その後、英文から訳されたジェームズ・バクスト『ロシア・ソヴィエト音楽史』（森田稔訳、音楽之友社、1971）もあったが、わずかな部数のみで、今は図書館で読めるだけである。

伊藤恵子『革命と音楽 ロシア・ソヴィエト音楽文化史』（音楽之友社、2001）は、久しぶりに現れた日本語で書かれた音楽史の本であり、非常に興味深く読んだ。筆者の博識が余すところなく発揮され、歴史的連関について示唆に富んだ指摘が多く、とりわけソ連時代については（後で取り上げる Maes がプロコフィエフとショスタコーヴィチに絞っただのに対して）マイナーな作曲家にもよく目配りし、コンパクトなボリュームに実に豊富な情報を織り込んでいる。特筆すべきは、筆者の専門である正教会の音楽にかんして記述した第1章であり、単行本の形で情報が入手しやすくなったことは歓迎されるだろう。第2章と第3章はそれぞれ、音楽生活を支えたパトロンたちとの関係、西欧との文化交流に焦点が置かれており、第4～8章は、事実上のソ連音楽史となっている。随所に織り込まれた図版は、同時代の状況を臨場感豊かに表すものが多く、理解を助けるだろう（たとえば、157ページの作曲家のカリカチュアは1948年のジダーノフ批判のさなかに『ソヴィエト音楽』誌に掲載されたものだが、当時の雰囲気鮮やかに示している）。

第1章「ロシア音楽史は聖堂から」では、ロシアのキリスト教化から記述を始め、タタールのくびき以降のネウマ譜のロシア化、ポーランド・カトリック文化の流入によるパルテス聖歌、ウクライナから流入した

カントと記述を進め、典礼劇・聖書劇・学校劇をオペラの先駆的なものとして位置づける。

第2章「音楽を育てた王侯貴族と富豪たち」では、西欧近代音楽の導入に積極的だった皇帝・貴族が「異文化に開放的な支配者たち」して語られ、ベリヤーエフやマーモントフら19世紀末のパトロンたちの功績が取り上げられる。

第3章「西欧との絆」では西欧の音楽界との交流が述べられ、ゲルステンベルクとブライトコプフという外資の音楽出版社、西欧出身の音楽家たちの活動と、ロシア・パレエ団など、逆に西欧に影響を与えた芸術活動・作曲家たちが紹介される。

そうした「西欧との絆」が断ち切れ、「音楽史上でもっとも強く独善的なパトロン」（p. 204）が支配したのが第4～8章で描かれるソ連時代であるが、扱われるトピックが多く、常識的な記述の中に貴重な記述が埋もれかかっているように見えるのがいささか残念である。それらについて具体的にコメントするのは、この書評の枠を越えるので細部については触れない。

ロシア革命やソ連文化について、伊藤氏は本書の中で一貫した態度を貫いているが、これについては根本的な異議を感じるので、一言述べておきたい。ロシア革命は「ロシア文化の重要な三つの場」、①ロシア正教会、②王侯貴族と富裕階級のサロン、③異邦人の社会を壊した（p. 11）、というのが筆者の基本的な立場であるが、仮に革命が起こらなかったとして、これらの3つは文化の中心であり続けたかどうかはわからない。資本主義体制となれば②が消えていくのは社会史的必然であろうし、「異邦人」も、ある程度同化していったことだろう。これは音楽文化に限ったことではないが、革命や社会主義、共産主義のイデオロギーだけですべてを説明することはできないのではないだろうか。今日のソ連文化研究においては、ソ連時代のロシア文化を、社会主義体制下という特殊性で特権化するのではなく、むしろ世界史的な共時性や、公認イデオロギーに基づく独裁的な体制の共通性、あるいはロシア文化史の歴史的連続性を重視して考える立場によって、従来の研究を相対化し、また補完していく、「全体主義文化論」と呼ばれる試みが顕著である（Maes もこの立場に近い）。伊藤氏の著作は、こうした潮流と逆行しているように思われる。

ロシア革命について肯定されるのは、「音楽教育の制度化と普及、音楽文化の浸透など」への貢献（p. 209）だけである。党や作曲家同盟、音楽官僚については、一貫して否定的な描写で貫かれ、一部の音楽家だけが肯定的に記述され、善悪のくっきりとした二項

対立によって分かりやすく描かれているとも言えるが、微妙なスタンスの違いや変化に注意が向けられていないとも言える。実際には音楽官僚のスタンスは様々で、独自のイニシアティブをどの程度とっていたかどうかは簡単には判断できない。少なくとも(a)キャリアのために確信犯的に振る舞った者、(b)政策理念に多少なりとも心酔していた者、(c)やむを得ず従った者がおり、同じ人物でも時期によってスタンスは異なるだろう。「音楽家の独裁者フレンニコフ」(p. 160)と書かれているが、フレンニコフは「官僚」の任務を遂行したのであって、官僚経験のない1948年の作曲家同盟書記長就任時から、「白紙委任」(同)され、独裁者として振る舞ったと考えるのは難しい。音楽政策は、単純に押しつけられたのではなく、党と音楽官僚、音楽官僚と音楽家たちの間のインターアクションの結果として実現された。音楽政策をめぐる会議の議事録はそうしたインターアクションの現場の1つとして読まれるべきだろう。

こうした欠点はあるが、一読を勧めたいことにはかわりはない。

Maes, Francis, *A History of Russian Music: From Kamarinskaya to Babi Yar* (University of California Press, 2002) は、1996年に出版されたオランダ語版の英訳である。

梅津の調査が正しければ、Maesは1963年生まれ、ベルギーのヘント大学人文学部芸術学科教員で音楽史を教えている。ここ20年間、ロシア音楽研究の刷新をリードしてきたRichard Taruskin¹の影響を強く受け、彼の研究成果が全面的に投入されている。Maes自身が述べているように、Taruskinは「現代音楽学の先頭を行くパイオニアと呼ぶことができよう……。本書におけるTaruskinの顕著な存在は、誰も見逃すことはできない。彼の著作にかんする無数の巻末注は、それ自体オマージュである」(p. xiii)。

第1章はロシアの作曲家の国民性や民衆性の神話を暴き出し、ムーソルグスキイやチャイコフスキイの「進歩的態度」はソ連時代の神話だとほめかし、晩年のバラキレフの反動性に言及し、オリエンタリズムとして受け入れられたロシア・バレエ団について触れ、「ロシア文化」の本質主義を明示的に否定している。

ロシア音楽の父とされ、国民楽派の祖とされるグリーンカを扱った第2章から具体的な偶像破壊は始まる。彼の民衆性を後知恵とほめかし、彼の創作の背景としてニコライ一世時代の文部大臣ウヴァーロフの

文化政策である官製国民性を指摘し、《皇帝に捧げた命》がそれに合致したオペラであることを明らかにする。

第3章は、職業的音楽家の確立を志向したアントン・ルビンシチーイン、バラキレフ、アレクサンデル・セローフの活動を取り上げ、第4-5章では、「ロシア音楽」の探求の理念と実践について検討し、第6章は19世紀後半の主要なロシア・オペラを網羅的に取り上げており、特にセローフやキューーのオペラの再評価が重要である。これらの中で、いわゆる「ロシア5人組」(ロシア語で言う「力強い一団」)は多元的に描かれ、「5人組」の結束が部分的なものに過ぎなかったことが示され、とりわけ晩年のムーソルグスキイの創作は、没落貴族のメンタリティーの反映として再評価されているが、これもTaruskinの功績だ。

チャイコフスキイに焦点を当てた第7章では、作曲家の脱聖人化が際だっている。主としてポズナンスキイの著作を援用して、ロマン主義的な作曲家像を解体し、神経症持ちではあるが、健全な常識を持った普通の人間であることを強調する。

第8章は、「5人組」=バラキレフ・グループに続く、リームスキイ=コールサコフを中心としたベリャエフ・サークルについて述べられ(ここでの重要な史料が、前述したリームスキイの回想録である)、第9章は「銀の時代」を扱い、ラフマーニノフ、スクリャービン、そしてストラヴィーンスキイとプロコフィエフの初期の活動が扱われる。

革命直後の状況に焦点を当てた第10章では、近年の全体主義文化研究の著作を取り込んで社会主義リアリズムを扱っているのが目を引くし、カテリーナ・クラークの議論を引いて、ネップ期を「理想化」すべきでなく、「文化のソヴィエト化が真の意味で始まった時期」(p. 244)と定義しているのも新しい。

亡命者に関して一章設けられているのも(第11章)、本書の特徴である。中心となっているのは、プロコフィエフとストラヴィーンスキイの活動で、とりわけ後者に関しては新たな見解に満ちているが、これはタラスキンの著作の要約である。中でも、舞踊音楽《結婚》に、ユーラシア主義が反映しているという指摘は衝撃を与えるだろう。トゥルベツコイによれば、トゥラン(ウラルアルタイ)音楽の特徴はアンヘミトニー(半音のない旋法)であり、さらに、ロシア人の心理的、社会的、芸術的特徴は、スラヴ以前のトゥラン時期にさかのぼれる。ヨーロッパの影響を被る前の原始的なロシアが彼らの理想だったから、アンヘミト

ニーが支配的な《結婚》はそれを体現している。スイス時代のストラヴィンスキイのネオナショナリズムは革命と亡命に対する反動として、想像のロシアを追い求めたというわけだ。

プロコフィエフについては別に第13章が割かれているが、ここでもタラスキンの存在は顕著である。冒頭では、ソ連帰国の理由を多面的に検討し、従来言われていたような、ノスタルジーや政治的純真さのためではなく、オペラ作曲家としてのキャリアのためだったと結論付けている。それから彼の作品をジャンルごとに説明しているが、オペラに最も重点を置き、とりわけ《セミョーン・コトコ》、《戦争と平和》について詳しい（ただし、事実関係については、Robinsonⁱⁱの伝記に依拠している）。

ショスタコーヴィチにかんする第14章では、まず現代の音楽市場との関係で『ショスタコーヴィチの証言』の受容について分析しているのが目を引く。それ以外では、オペラ《ムツェンスク郡のマクベス夫人》について、マルクス主義的な階級闘争オペラと規定し、50～60年代の改訂を自発的なものだとし、改作の強要を否定しているが、これはすでに共有されつつある解釈だ。他にヨアヒム・ブラウンの研究を要約した「ユダヤ的テーマ」の節などがある。

副題「《カマーリンスカヤ》から《バービー・ヤール》まで」とあるように（後者はショスタコーヴィチの交響曲13番を指す）、記述はショスタコーヴィチで終わる。第14章の終わりでは、「新たな世代の作曲家たちが現れた」として、ウストヴォーリスカヤ、シニートケ、ペルト、グバイドゥーリナの名が上がっているが、「彼らの作品の評価は、この本が扱う時期を越えたところにあるし、いずれにせよ評価には時期尚早なのだろう」としてこの段落で全文を閉じているが、90年代にはシニートケやデニーソフにかんする本格的な英文の著作もでており、少し不満が残るところである。

総じて言えば、Maesの通史は、Taruskinを中心とした近年の研究を整理し、国民国家論やオリエンタリズムなどの他者認識にまつわる方法論的視座を織り込んで通史の形にまとめ上げたものであり、著者自身のオリジナリティは薄い。もちろん、通史を書く上で、他人の著作を参照するのは当然で、すべてがオリジナルの研究成果ではあり得ない。それとともに、「私はリスクをおかさなかった。オランダ語ではロシア音楽の包括的な概説書がなかったからである」と著者自身が述べるように、英語圏での読者を念頭においていな

かったこともあるだろう。しかし、英訳されたことからその評価は明らかで、英語圏でも一定の役割を果たすことは間違いない。

ここで私たちは、単に音楽史はどう書かれるべきか、ということにとどまらず、「通史」はどう書かれるべきか、という問題に直面しているように思われる。Maesが1963年生まれと若手であることも、通史とは大家が書くものだ、という私たちの通念を裏切っている。伊藤氏の通史と比べるなら、両者の立場は根本的に対立していると私は考えるが、奇妙な共通点は、Maesがロシア語文献を用いず、伊藤氏が英語文献を用いていない点にある。英語文献とロシア語文献の両方を整理するには途方もない労力を必要とするのは明らかであり、これも1つの見識といえるかも知れない。Maesは従来の神話的記述にとらわれない新たな見解をコンパクトにまとめることに成功しているが、他方、伊藤氏は多数の一次史料を読みこなして、ディテールを生々しく豊かに描いている点が優れており、相補的である。

最後に、このように批判を連ねてきた先には、それならば「自分ならどう書くか」という問いが突きつけられるだろう。研究者として自分自身の怠慢を感じずにはいられない。言い訳になるが、空白を埋める試みとして、梅津は1995年に森田稔との共訳により『ロシア音楽史Ⅰ・Ⅱ』を全音楽譜出版社から上梓した。これも扱っている時期が短いことや、記述も古く、ソ連で出た60年代の本として一定の偏向を帯びているなど、問題が多いことを認めなければならない。自分の著作を世に問うことを考えていきたいと思う次第である。

（うめつ のりお・東京大学）

注

ⁱ Richard Taruskinの主要著作は次の通り。

・ *Opera and Drama in Russia as Preached and Practiced in the 1860's*, UMI Research Press, Ann Arbor, 1981.

・ *Mussorgsky: Eight Essays and an Epilogue*, Princeton University Press, Princeton, 1993.

・ *Stravinsky and the Russian Traditions: a Biography of the Works through Mavra*, University of California Press, Berkeley, 1996.

・ *Defining Russia Musically: Historical and Hermeneutical Essays*, Princeton University Press, Princeton, 1997.

ⁱⁱ Robinson, Harlow, *Sergei Prokofiev: a biography*, Viking, New York, 1987.